

令和 7 年度病虫害発生予報第 9 号

令和 7 年 1 2 月 1 日
山梨県病虫害防除所

今月の天気予報

1 1 月 2 7 日気象庁発表、1 か月予報による関東甲信地方の向こう 1 か月（予報期間 1 1 月 2 9 日～1 2 月 2 8 日）の天気は次のとおりです。

向こう 1 か月の気温はほぼ平年並の見込みです。高気圧に覆われやすいため、向こう 1 か月の降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

I 特に注意が必要な病虫害

【野菜】

作物	病虫害名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制トマト	黄化葉巻病	—	やや多い	<p>○11月下旬現在、巡回ほ場における発生量はやや多い。</p> <p>□発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れてコナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、土中に埋めるなど適切に処分する。</p> <p>□抑制栽培終了後の対策については、「Ⅲ 各種病虫害対策」の項目を参照する。</p> <p>□タバココナジラミが病原ウイルスを媒介するため、次項を参考にコナジラミ類の防除を徹底する。</p>
	コナジラミ類 (タバココナジラミ・オンシツコナジラミ)	—	やや多い	<p>○11月下旬現在、巡回ほ場での発生量はやや多い。</p> <p>○11月下旬現在、黄色粘着トラップ設置ほ場（中央市）における誘殺量は、ハウス内外でやや多い。</p> <p>○向こう 1 か月の気温はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□侵入を防ぐため、施設開口部（天窓、側窓、換気扇口等）はすべて 0.4mm 目以下の防虫ネットを展張する。出入り口は二重カーテンにするなどして侵入を防止するとともに、ネットの隙間や破れ等がないか注意して確認し、不備があった場合は直ちに補修する。</p> <p>□黄色粘着板を設置して発生状況を確認し、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> <p>□施設内外の雑草は、増殖源となるため除草を徹底する。また、芽かき、葉かきした茎葉は適切に処理する。</p> <p>□ウイルス病の発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて虫を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、適切に処分する。</p>

Ⅱ 各作物の病害虫発生予報

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制トマト	疫 病	—	平年並	<p>○11月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう 1 か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉・果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</p>
	灰色かび病	—	平年並	<p>○11月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう 1 か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。</p> <p>□施設内が低温、多湿にならないよう、適度な換気を行い、過度な灌水は控える。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉・花卉・果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。</p>
	葉かび病	—	平年並	<p>○11月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう 1 か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□抵抗性品種でも発病する菌が存在するため、注意して発病の有無を確認する。</p> <p>□すすかび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。</p> <p>□県内で効果の低下がみられる薬剤もあるため、防除薬剤は総合農業技術センター令和 4 年度成果情報「トマト葉かび病の抵抗性品種に感染する系統の発生および有効薬剤」(https://www.pref.yamanashi.jp/documents/108010/r4_10_hakabi.pdf) を参考に防除する。</p> <p>※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること</p>
	すすかび病	—	並 (例年比)	<p>○11月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう 1 か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□葉かび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
イチゴ	炭疽病	－	平年並	○11月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○県下各地のほ場で発生がみられる。 ○向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。 □発病株は感染源になり、降雨や灌水により急速に蔓延するため、発病が確認された株は直ちに抜き取って適切に処分する。 □ベンレート水和剤(FRAC:1)、アミスター20フロアブル(FRAC:11)に対し耐性菌が確認されているため、他の系統の薬剤を中心とした防除を行う。 ※参照 総合農業技術センター令和6年度成果情報「イチゴ育苗における底面給水の炭疽病被害軽減効果と薬剤耐性菌の発生状況」(r6_13_ichigotanso.pdf)
	うどんこ病	－	平年並	○11月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。 □早期発見に努め、発病した茎葉は除去して施設外に持ち出し、処分する。 □多発すると防除が難しくなるため、予防散布に努める。
	ハダニ類	－	やや多い	○11月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並からやや多い。 ○向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避けローテーション散布を行う。

【野菜全般】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
灰色かび病	－	平年並	○11月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。 □施設内が低温、多湿にならないよう、適度な換気を行い、過度な灌水は控える。 □早期発見に努め、発病した葉・花卉・果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。 □前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。

III 各病害虫対策

【抑制トマト・抑制キュウリ収穫後の対策】

[灰色かび病](#)、[トマト葉かび病](#)、[トマトすすかび病](#)、[トマト疫病](#)、[キュウリ褐斑病](#)

発病葉等の残さは第一次伝染源となるため、施設外に持ち出し処分する。

[アザミウマ類](#)、[ハモグリバエ類](#)、[コナジラミ類](#)、[ネコブセンチュウ](#)

- (1) 施設内外の雑草は越冬場所となるので、除草を徹底する。
- (2) 収穫後、ネコブセンチュウ対策等として土壌消毒を行う。

【半促成トマト・半促成キュウリ作付前の対策】

- (1) 土壌中に残存している病原菌や害虫を死滅させるため、土壌消毒を行う。
- (2) 雑草はミカンキイロアザミウマ、マメハモグリバエ等の増殖源となるため、施設内外の除草を徹底する。

【トマト黄化葉巻病・トマト黄化病の防除対策】

抑制裁培終了後

- (1) 残渣はコナジラミ類の発生源となるため、施設内で完全に枯らしてから適切に処分する。
- (2) 施設内外の雑草は、コナジラミ類の増殖源となるため、除草を徹底する。
- (3) タバココナジラミは低温に弱く、冬期氷点下になる地域では露地越冬が困難になるため、厳冬期に施設を開放して低温条件にし、施設内で越冬させないようにする。

定植前

- (1) 育苗圃場や栽培圃場の開口部に 0.4 mm以下の防虫ネットを展張し、コナジラミ類(成虫)の侵入を防ぐ。なお、目合いの細かいネット使用の際は、施設内の温度上昇に注意する（施設内の高温が心配される場合は、天窓部分の防虫ネットを 0.5～1.0 mm程度を目合いにしても、一定の侵入防止効果は期待できる。）。
- (2) 設置した防虫ネットは隙間や破れ等がないか注意して確認し、不備があった場合は直ちに補修する。
- (3) 栽培施設の出入口は二重構造にし、開放状態にならないようにする。

定植時

- (1) 病害虫の寄生が無い苗であることを確認する。
- (2) ベストガード粒剤またはスタークル粒剤(アルバリン粒剤)を 1 株あたり 1～2g 植穴に土壌混和する。定植時の粒剤処理は、初期防除として防除効果が高いため必ず実施する。

生育期

- (1) 施設内に黄色粘着板を設置し、コナジラミ類の発生状況を定期的に確認して、発生初期の防除を徹底する。
- (2) コナジラミ類成虫は成育初期～中期では、トマトの低い位置で寄生し、幼虫は葉裏に多いため、薬剤散布の際は低い位置から葉裏に十分薬液がかかるよう丁寧に行う。
- (3) 薬剤効果の低下が認められるタバココナジラミ（バイオタイプ Q）が広く存在するため、薬剤選択に注意する。なお、同一系統薬剤の連用は、薬剤効果の低下につながるため、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を実施する。
- (4) 発病株を発見したらすぐに抜き取り、直ちに防除を行う。
- (5) 抜き取った株や芽かきした茎葉は、ビニール袋に入れて枯死させてから持ち出す。
- (6) 施設内外の雑草や野良生えトマトはコナジラミ類の増殖源となるため、除去する。

【モモ・スモモ】

モモ縮葉病・スモモふくろみ病

休眠期（12月～2月上旬）の防除剤は、天候の安定した風のない日を選び、枝先までていねいに散布する。散布後に降雨が多い場合は、追加散布を行う。

モモせん孔細菌病・スモモ黒斑病

枯れ枝等は伝染源になる恐れがあるため、剪定時に見つけしだい取り除き、圃場外へ持ち出す。

【モモ・スモモ・オウトウ】

カイガラムシ類

カイガラムシ類の発生が見られる園では、

- (1) ブラシ等でかき落とすとともに、寄生の多い枝は剪除する。
- (2) モモでは2月上旬までにスプレーオイルまたはトモノールSのいずれか50倍を散布する。ウメシロカイガラムシが多い場合は、樹勢に注意しながら、30～40倍を用いてもよい。
- (3) スモモでは、1月までにスプレーオイルまたはトモノールSのいずれか30倍を散布する。

- (4) オウトウでは、2月上旬までにスプレーオイル30倍を散布する。
- (5) スプレーオイル、トモノールSの散布にあたっては、散布終了まで常時攪拌し、二度がけはしない。また、ブドウ、ウメには薬害が発生するため、隣接園では使用しない。

【ブドウ】

黒とう病・晩腐病

越冬菌の密度を抑えるため、病斑の見られる枝・果梗の切り残し・まきひげは取り除き、棚面をきれいに保つ。

【果樹全般】

チュウゴクアミガサハゴロモ

枝に産卵痕を見つけたら、発生密度低減のため切除し、地中深く埋めるか焼却するなど適切に処分する。 ※参照 令和6年度病害虫発生予察特殊報第2号（チュウゴクアミガサハゴロモ）

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/70568874362.html>

IV その他

【農薬の保管管理と適正使用について】

- 1 農薬の適正使用や、計画的な購入のため、農薬保管庫の整理を行いましょう。
- 2 有効期限切れなど使わなくなった農薬は放置せず、処理業者に依頼して適正に処分しましょう。
- 3 農薬による事故を防ぐため、保管庫にはカギをかけておきましょう。
- 4 農薬を購入・使用する際には、農薬登録番号や使用基準などの登録内容を必ず確認しましょう。
- 5 農薬の使用にあたっては、使用方法をよく確認して正しく使いましょう

(参照 https://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/kenkyu/nouyaku_shiyou.html)

連 絡 先

山梨県病害虫防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病害虫防除所ホームページ

予報対象作物を中心に「トラップ調査結果」「病害虫写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>